2005（平成17）年6月

AICHI UNIVERSITY LIBRARY COMMUNICATIONS 2005. 6

韋編（いへん）

愛知大学図書館報

No. 31

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、なめし皮の紐でとじた上古の書物。

図書館は待っている

図書館長　玉　置　光　司

この度、思いがけなく図書館長を拝命したが、私には時代の趨勢を見極め、大所高所から図書館のありようを論ずる能力は乏しい。よって、私の使命は、私自身の経験に基づいて、読書の必要性、重要性をアピールして学生諸君に広く図書館を利用していただくよう呼びかけることにあると考えている。

頭を使うより体を動かすことが好きだった私は、中学生の頃、自分の経験した実感を疑いようのないものと信じていた（思い込みの激しい人間であったとも言える）。藤村操の厳頭之感の一節を“大いなる主観は大いなる客観に一致する”＊と誤って覚え、若いのによくここまで言うなと呆れながらも自分と同じメンタリティが気に入っていた。そんなとき、大学の哲学科を卒業した新任教師が、授業中脱線してプラトンのイデア論「君たちが目にしているものは実在するか？」を話し始めた。寝惚けているならいざ知らず、覚醒時の自分の目を疑うとは何事かと訝ったが、それにしても2400年間にわたり、こんな疑問に哲学者が魅かれてきたことには、それなりの理由があるかも知れない。もしそうであれば、私も自分の実感を無条件に信じることは問題かもしれないと不安になった。

しかし、それでは、この世で一体何を信じればよいのか？　こんな疑問が、私の哲学あるいは読書へのきっかけとなった。大学に入って、すぐに『小林秀雄全集』（新潮社）を買った。小林は難解な文章で知られた人だが、人生の達人のイメージがあり、何とも格好が良かった。小林は若い頃から本を読みまくっている。私も本を読まないことには始まらないと思い、空いた時間をよく図書館で過ごした。しかし、私は漕艇部に入っていて、1年の4分の1は合宿所で寝泊りしてボートの練習に明け暮れていたので、気楽に本だけ読んでいるわけにもいかなかった。1週間に1冊のペースで読んでも1年で約50冊、この先50年生きたとしても3000冊は読めない。人生はあまりにも短い。膨大な蔵書を持つ図書館でそんな感傷に耽ったことを記憶している。

こんな感傷を吹き飛ばすような猛烈な読書家がいる。立花隆である。氏の本『ぼくはこんな本を読んできた』、『ぼくが読んだ面白い本・ダメな本そしてぼくの大量読書術・驚異の速読術』（共に文藝春秋社）を学生諸君に薦めたい。自身を知的欲求がやたらに激しい異常知識欲求者という氏の読書量は凄まじい。例えば、氏が“脳死”について半

年ほど「中央公論」に連載したとき、準備のため買ってきて読んだ医学書は積み重ねて3メートルから4メートルになるという。氏はその間同時並行的に他の仕事もこなしている。その1つが、年間約6万3千点刊行される新刊書の中から面白い本を見つけ出して、週刊誌の「私の読書日記」欄で紹介する仕事である。このために目を通す本の量がまた凄い。立花の2冊の本は速読の薦めでもある。速読の極意は集中力のようだが、具体的なノウハウが散りばめられていて興味深い。

世界で最も完備した大学院制度を誇る米国大学院で要求される読書量も半端でないようだ。ブラウン大学大学院で文系の博士号を取得した吉原真里は『アメリカの大学院で成功する方法』（中公新書）の中で、毎回の授業に課されるリーディングの量が猛烈で、1週間に4冊の割合で研究書あるいはそれに相応する書物を読まされたと書いている。いかにしてこの困難をのりこえたか、この本は大学院生活の具体的アドヴァイスに満ちていて、これから海外留学を考えている人だけでなく、本学大学院に学ぶ人にも参考になるだろう。

立花も断っているが、速読が不可能な分野も多い。速読は特定の分野のパースペクテブを、限られた時間で理解するための最強のスキルであるが、研究者は速読だけでは話にならない。京大教授の西村和雄は『経済数学早わかり』（日本評論社）のあとがきで、恩師McKenzie教授の言葉「本や論文を“知っている”あるいは“読んだ”というのは、その内容の本質や重要な証明のポイントが頭にイメージ豊かに残っている場合にのみ使う言葉である」を紹介し、精読のなんたるかを述べている。学問に王道なしである。私個人の若い頃の経験でいえば、確率論の世界的名著Fellerの“An Introduction to Probability Theory and Its Applications, Vol. II” (John Wiley & Sons) を教員仲間で読んだことがある。毎週金曜日、授業終了後にコーヒーをすすりながら2時間ほど議論したが、5年間で300ページも進まなかった。群盲象を撫ずといった読書会であったが、理系の本格的な本はきちんと読むのにそれくらいの時間がかかるものである。

最近、村上春樹の『海辺のカフカ』（新潮文庫）が読まれているという。主人公カフカ少年は世界で最もタフな15歳を目指す猛烈な知識欲求者として描かれている。森の小屋で本を読む場面は次のように描写される「歴史書を読み、科学書を読み、民俗学や神話学や社会学や心理学の本を読み、シェイクスピアを読む。1冊の本を最初から最後まで読みとおすよりは、重要だと思える部分を、理解できるまで何度もていねいに読みかえすことをこころがける。そういうふうに読んでいると、様々な種類の知識が次から次へと、僕の中に吸いこまれていくたしかな手ごたえのようなものがある」。彼の読書はこの世を行きぬくために、自分自身のロードマップを作る作業としての濫読である。

今まで、本と無縁であった人も一度図書館に足を運び、カフカ少年のような読み方を試みてはどうか。最も大事な青春時代、バイトだけで貴重な時間を使い果たすのは余りにも惜しい。厳しい時代をタフに生き抜くための最善の方法は、自由な時間がある今、図書館の本を片っ端から開いてみることだ。きっと何かを見つけるだろう。図書館は君たちを待っている。

（経営学部教授）

（脚注）

＊ 正しくは“大いなる悲観は大いなる楽観に一致する”である。